様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　12 日現在

機関番号：32632
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21720274
研究課題名（和文）　中世フランドル都市の宗教社会史

研究課題名（英文）　Socio-Religious History of Medieval Flemish Cities

研究代表者
青谷　秀紀（AOTANI HIDEKI）
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80403210

研究成果の概要（和文）：本研究では、フランドル都市における宗教儀礼や宗教的祝祭を取り上げ、中世後期の都市社会における市民の宗教活動や宗教心性のあり方に考察を加えた。とりわけ、フランドル史ではこれまであまり顧みられることのなかったプロセッションや贖罪、贖宥といった宗教現象に着目することで、それらを通じた、都市の人的結合関係や都市アイデンティティの形成のみならず、都市・君主間のコミュニケーションの展開についても実態が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the religious activities and mentality of late medieval urban societies, with a focus on rituals and feasts in Flemish cities. Particularly, analyzing religious phenomena such as processions, penitence, and indulgence—to which little attention has been paid in Flemish history—I clarified not only the types of urban sociability and civic identity that were formed but also how cities and rulers developed communication through them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、ヨーロッパ史・アメリカ史
キーワード：フランドル、都市、宗教、儀礼

１．研究開始当初の背景

中世フランドル史の研究が、都市史を一つの柱としていることはよく知られている。しかし、近年に至るまで都市と宗教の関連を問うような研究はさほど多くなかった。

中世後期フランドルで展開された宗教活動や宗教心性という点では、一般に J・ホイジンガの『中世の秋』（1919 年）が想起されるかもしれない。事実、ホイジンガがファン・エイク芸術を当時の社会生活全体との関連から理解せんがために『中世の秋』を構想したことはよく知られている。しかし、じつのところこの書物の重要な部分をなす宗教生活及び宗教心性を扱った各章では、ファン・エイクが活躍した場であるフランドル都市に言及されることは驚くほどに少ない。さらに、そこでは特定の信仰集団の活動を越えて、広く都市民全般の間で宗教を媒介として

形成される社会的結合関係や都市空間の具体的なコンテクストのなかで繰り広げられる宗教儀礼について詳細な社会史的議論が展開されることはなかったのである。

こうしてホイジンガにより先鞭がつけられつつも、未開拓のまま残されたフランドル宗教社会史の多くの課題は、1963 年の J・トゥッサールの大著により解決されたかに見えた。これは、中世後期フランドルにおける宗教儀礼や宗教心性を扱った、20 世紀末に至るまでほぼ唯一といってよい総合的な研究であった。しかし、着想面ではひじょうに豊かなこの書物も実証面での多くの誤りから痛烈な批判を浴び、フランドル宗教社会史研究はこの失敗に委縮してしまったかのように沈滞する。もちろん 20 世紀後半の間も、純粋にキリスト教史的・教会史的関心から行われた研究は存在する。しかし、フランドル都市の教会組織や宗教活動を社会との関連のうちに考察しようと試みる本格的実証研究は、トゥッサール以後ほとんど現れなかったのである。1980 年代後半以降、W・シモンズによる都市と托鉢修道会をめぐる研究、そして P・トリオによるヘントの兄弟団をめぐる研究が現れ、ようやく中世フランドルの都市社会と宗教の関係も改めて検討の対象となる準備が整った。事実、近年ではネーデルラントの修辞家集団を対象に市民的信仰の問題にも切り込んだ A・L・ファン・ブリュアーネの著作のような優れた研究も登場している（付け加えるならば、本研究の遂行中にも、A・ブラウンによるブルッヘの宗教史を扱った本格的な研究が公刊されている）。にもかかわらず、近年の A・スペーチェンスの概観が示すように、極度に都市化が進んだこの地域の社会に宗教が及ぼした影響や都市民の信仰については、依然として多くの考察対象が手付かずのままわれわれに残されてきたのである。

２．研究の目的

以上のような背景を受け、本研究では、中世後期のフランドル都市、とりわけヘントやブルッヘといった大都市における都市民の宗教活動と宗教心性を、宗教組織およびその活動を軸とした人的結合関係の形成や、プロセッションをはじめとする宗教儀礼の分析を通じて浮かび上がらせようと試みた。14 世紀から 15 世紀にかけて北ヨーロッパで最大級の人口を誇ったヘントやブルッヘは、アルプス以北でもっとも活発な経済的・文化的発展を遂げ、多様な社会集団が活動を展開する都市だった。これら北ヨーロッパ随一の都市には、その規模に見合うだけの数多くの修道院や教会、慈善施設や兄弟団が存在し、宮廷エリートや都市エリートたちが集っては、日常的に華々しい祝祭や荘重な死の儀礼を展開したのである。これらの組織の人的構成や宗教活動の分析を通じて、都市の教会組織が多様な社会的結合関係の結節点を成し、各種の儀礼を通じてそれらの関係がたえず形成され、あるいは組み直されていた点を明らかにすることが本研究の目的であった。

ただし、都市を地理的にも社会的にもある程度明確な境界線を伴った半ば閉じられた一つの政治社会単位として想定していた古い研究に対して、近年の都市史研究は、一都市を越えた広がりをもつ都市間ネットワークを意識する傾向にある。フランドルの政治史や社会経済史研究の分野では、都市や都市内の様々な社会集団を、これらと近隣他都市、あるいは君主の宮廷との間で張り巡らされた関係性のなかで機能するものと捉え、その活動の様態を明らかにしようとする手法がしばしば確認されるのである。前述のファン・ブリュアーネの研究が示唆するように、都市の宗教のあり方もこうした一都市を越えた射程のなかで考察される必要があるだろう。この点を受けて、本研究でも、ヘントやブルッヘといった一都市を越えた広がりのなかで形成される社会的結合関係や、同じくそうした広がりのなかで実践される宗教活動にも大いに目配りしつつ、フランドル都市の宗教文化と社会の総体を捉えようと試みた点は明記しておきたい。

３．研究の方法

研究の方法として、刊行済みの叙述史料・文書史料を活用することはもちろんのこと、未だ多くが日の目を見ないままとなっている未刊行史料を活用すべく、ベルギー各地の文書館や図書館において調査を行った。

ブルッヘ司教文書館には、都市の宗教文化の中核を担ったシント・ドナース教会に関する文書が豊富に収蔵されており、これらは同教会の組織やプロセッションの実施に関して貴重な情報を含むものであった。また、ブルッヘの聖血文書館には、聖血行列に関する文書が数多く収められており、これらについても調査を行った。その他、ブルッヘ国立文書館に収められている聖母教会関連史料や、市立文書館に保管されている複数の兄弟団関連文書も、研究上、有益な手がかりを与えてくれた。

ヘントでは、市立文書館とヘント大学図書館を中心として、未刊行史料の収集にあたった。市立文書館では、主として都市会計簿史料から教皇贖宥に関する記録を手に入れることができ、大学図書館の手稿史料部門でも、これに関連するいくつかの叙述史料を参照しえた。

現地で実際に参照するまで必ずしもその

有用性が明らかでない未刊行史料に関しては、上記の調査のすべてが明確に研究成果に結びついているわけではない。しかし、これまで開拓が進んでいなかった領域で実証的な議論を構築するにあたって、そのいくらかが大きな支えとなっていることは間違いない。

４．研究成果

本研究の研究成果は、大別して二つの宗教現象に関するものであるといってよい。一つはプロセッションである。この点に関しては、都市ブルッヘで行われた聖血行列や総行列など複数の類型のプロセッションが、それぞれ都市社会においてどのような機能を担っていたのかに注目して考察を加えた。聖血行列については、聖遺物を掲げて都市を周回することによる都市の守護機能や、都市の諸集団が聖遺物のもとに集うことで実現される社会的統合の機能の他、聖遺物により都市の各所に聖なる徴を刻み込み、都市の聖性を賦活する機能があったことなどを指摘した。

聖血行列は、毎年特定の日に行われる祝祭であったが、これとは別に、15 世紀後半のブルッヘで増加した臨時のプロセッションである総行列についても考察を加えた。とりわけ、15 世紀末ブルッヘの歴史叙述には数多くの総行列が記録されており、それらに記された行列のコースや用いられた聖遺物の種類などを分類することで、プロセッションが混乱期の都市社会で、都市の宗教的中心地であるシント・ドナース教会を軸に、都市民の不安を鎮め、これを統合する機能を担っていたことを明らかにした。さらに、記録に数多く登場する贖罪者たちの姿にも着目し、ネーデルラント都市における贖罪巡礼の慣習にも言及しながら、贖罪者たちを含む総行列が、都市における一種のスペクタクルとして機能していた点も明らかにした。

なお、本研究は主としてフランドル都市を対象としたものではあるが、その特質を浮かび上がらせるため、南ネーデルラントの周辺諸地方の事例も複数取り上げ、比較的考察も行った。とりわけ、フランドル地方の大部分が属する司教区の司教座都市トゥルネで開催される聖母プロセッションは、異なる手段を用いてではあるが、ブルッヘの聖血行列同様に、都市の各所に徴付けを行うことで都市の聖性を喚起する仕掛けを含んでおり、比較のための重要な事例を提供している。また、このプロセッションには、14 世紀前半から 15 世紀後半に至るまで、フランドル最大の都市ヘントの代表団が毎年送り込まれ、行列に加わった。都市空間を大規模に活用し、都市民の多くが参加するプロセッションを欠いていたヘントでは、トゥルネのプロセッションに代表団を派遣し、これに参加することが都市の宗教的アイデンティティを確認する重要な機会だったのである。

こうしたプロセッションと並んで、本研究でもう一つの考察の柱となったのは、贖罪および贖宥である。贖罪行為や贖宥については、すでに上記のプロセッションの考察の際にもたびたび言及していた。しかし、より本格的にはメヘレンやヘントといった都市で見られた教皇贖宥関連の祝祭もしくはイヴェントの分析が、魂の救済を希求する市民的信仰のあり方や都市・君主間の宗教を媒介としたコミュニケーションについて考察する重要な機会をもたらした。1450 年、ローマには、教皇が布告した聖年の全贖宥を得ようと、数多くの巡礼者が流れ込んだ。その一年後、ブルゴーニュ公国ではメヘレンの街がローマの代わりに全贖宥を得ることのできる聖地となった。さらにメヘレンでは 1455 年から 65 年にかけても、同様な全贖宥が巡礼者たちに与えられるという措置がとられた。この、都市の聖地化が実現されるに当たっては、都市はローマ教皇庁のみならず、君主であるブルゴーニュ公とも数多くの交渉を重ねた。本研究では、メヘレンの都市政府が、この教皇贖宥を通じて、いかに都市の宗教的環境の整備に配慮していたか、そしてその祝祭を実現するにあたっての様々なプロセスで、いかに多様な形で君主とのコミュニケーションを試みたかについて、概観的考察を行った。

そして、その考察をもとに、1467 年にメヘレンの教皇贖宥を引き継いだヘントの事例については、いっそう詳細な調査を実施した。メヘレンの場合と同様に、ヘントにおいても都市政府は君主であるブルゴーニュ公と綿密な交渉の末にこの教皇贖宥の聖地となる特権を獲得したが、重要なのは、ヘントの場合、その聖地化が君主に対する都市反乱の時期と重なっていたことであった。都市は、ブルゴーニュ公による苛烈な処罰の可能性に脅かされながら、自都市の聖地化を実現したのであり、また君主の側でも、強圧的な態度を示すと同時にその特権を認可したのである。こうした、両者の間の微妙な駆け引きを、都市会計簿を中心とした史料から浮き彫りにすることで、この時期のフランドル都市の信仰のあり方が、ときに露骨な形で君主政治の展開と交わることを示しえたのは、本研究の一つの成果であるといってよい。

プロセッションや贖罪、贖宥といった宗教的主題は、これまでのフランドル都市史研究において必ずしも大きな注目を集めてきたわけではない。しかし、この時期のフランドル史の全体像を構築するにあたって、それらが不可欠なものであることは、本研究から明らかとなった。今後は、さらに地理的枠組みを広げてネーデルラント都市の事例を豊富

に渉猟し、本格的な検討を加えることが求められるが、その際、本研究の成果は、重要な議論の基盤を提供するであろうと予想されるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①青谷秀紀「赦しのポリティクス　－中世後期ネーデルラント都市の贖宥とブルゴーニュ公－」、『清泉女子大学紀要』59 号(2011 年)、pp.21-35、査読有。

②青谷秀紀「中世後期南ネーデルラントの都市社会と贖宥」、『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』18 巻(2010 年)、pp.87-202、査読なし。

③青谷秀紀「プロセッションと市民的信仰の世界　―南ネーデルラントを中心に―」、『西洋中世研究』2 号(2010 年)、pp.36-49、査読有。

〔学会発表〕（計２件）
①Hideki AOTANI, “The Papal Indulgence as a Medium of Communication in the Conflict between Charles the Bold and Ghent, 1467-69”, International Medieval Congress, University of Leeds (England), 11, July 2012.

②青谷秀紀「プロセッションと市民的信仰の世界　―南ネーデルラントを中心に―」、西洋中世学会第 2 回大会シンポジウム『メディアと社会』、名古屋大学、2010 年 6 月 27 日。

〔図書〕（計１件）
①青谷秀紀「顕現する天上都市、遍在する永遠の都　―中世後期南ネーデルラントの宗教儀礼と都市の聖地化―」、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西―起源はいかに語られるか―』、勉誠出版、2011 年、pp.84-106（総頁数 502）査読なし。

６．研究組織
(1)研究代表者
青谷　秀紀（AOTANI HIDEKI）
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80403210